2022年６月12日 花の日こどもの日・教会創立記念礼拝

メッセージ「命と平和を求めて」　　牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 8章1-17節

今日は６月の第２日曜日で、「花の日こどもの日」です。これは19世紀にアメリカの教会で始まった行事だそうです。日本では各地が梅雨入りしていく季節ですが、北米ではたくさんの花が咲く季節として、お花を教会に持ち寄って、それらを与えてくださる神様に感謝する礼拝をささげたのが由来なのだそうです。またその礼拝の中で合わせて、子どもたちもそれらの花のようにすくすくと育つことを願って、子どもたちへの祝福が祈られたことから「花の日・子どもの日」と呼ばれるようになったとのことでした。

また今日は久宝教会の創立63年を記念する日でもあります。正確には明後日14日が教会の63歳の誕生日です。ここ数年、毎年この教会創立記念礼拝では、「埋もれた宝」という賛美歌を歌っています。この賛美歌は、小林達夫先生と親しかった八尾東教会の有澤禧年（つぐとし）先生が今から40年ほど前に作られた賛美歌だそうで、有澤先生から久宝教会や日本コイノニア福祉会に対して贈られたとのことですが、今でも八尾東教会においても「八尾東教会の賛美歌」として伝えられているそうです。

なかなか歌うのが難しく、普段あまり歌わないのですが、この歌にはキリスト教の「宣教」というものが、上手に表わされていると、改めて眺めて見るたびに思わされます。まず１番では、「①畑の中に埋もれた宝、気付いていない人にとっては、ただの畑の土。しかし、その中にこそ宝がある（マタイ 13:44）」と歌い、２番では「②豪華なお城の中にではなく、粗末な家畜小屋の馬槽（まぶね）（飼い葉桶）の中という、『まさかこんな所に（生まれるはずがない）』と思われる所に生まれた赤ちゃんこそが、救い主だった（ルカ 2:6−7）」と歌い、続く３番では「③落とせば割れてしまうような土の器である私自身の中にも『埋もれた宝』は確かにあって、輝いているんだ（第２コリント 4:7）」と歌っています。そして最後の４番では「④そのような『埋もれた宝』は、隣人（となりびと）である仲間たちの中にも見つけることができ、その実りを『収穫の主』と一緒に私たちは刈り取るのである（マタイ 9:37−38、ヨハネ 4:

38）」と言っています。

久宝教会のこれまでの歩みを振り返ってみますと、この歌が作られた 40 年ほど前の頃には、複数の施設の職員たちや、ボーイスカウト・ガールスカウトに集まった子どもたちを含めて、毎週 100 人以上が礼拝に来ていたそうです。そんな時代があったことは、今からではとても想像ができませんが、当時、大勢の人が教会に集まっている様子を見ながら、「私たちの教会は、神様の恵みを受けて、ここまで大きくなりました」と言い、この歌にあるように「この教会には夢がある」と言い、「もっともっと大きな教会にしていく使命がある」と思っていたのだとしたら、40 年を経た今、それは実現されていません。

私たちは望むと望まないとに関係なく、否が応でも今、大きな変化の時代の只中にいます。人口が増え、あちこちに新しいものが出来、みながそれなりに豊かになっていった時代は過ぎ去り、高齢化と経済格差が急速に進み、それに伴って少子化にも拍車がかかっています。2 年前からはそこに新型コロナウイルス感染症がやって来て、今年 2 月からはロシアによるウクライナ侵攻が続いています。これまでは「食料自給率の低い日本は、戦争などで輸入が滞ったらどうなるのか」「インフレになったらどうなるのか」などの問題について、多くの人が「そんなことはあり得ない。まず起きないから心配しなくても大丈夫」と言って、あまり真剣には考えて来なかったのではないかと思います。それこそ「グローバル経済」という世界貿易は、お互いの国家の利益のために世界平和を推進するだろうと考えられて来ました。しかし、実際は逆でした。平和であることは確かに経済発展を促進しますが、経済発展したからといって世界は必ずしも平和にはなりませんでした。人の心の中にある敵意や憎しみ、憎悪や差別心というものは、モノや金の豊かさだけでは満たされないということが、今や明らかになりました。今もロシアの軍事行動が継続されているのは、豊かな資源を持つロシアと貿易取引を継続している関係諸国があるからで、ロシアはそれらの国々の後ろ盾を得て、戦争を続けています。

日本国内では、世界の物流網の混乱の中で、収入は上がらないまま、物価だけが上がり続けています。おそらく来月の参議院議員選挙の後に、与党勢力から各業界への圧力が解けて、ありとあらゆるものが値上がりするのだろうと思いますが、心配です。このままでは本当に生活できなくなっていく人たち、食べていくことすら出来なくなる人たちが、新たに大勢出てしまいかねません。まさに今の時代は、命

とは逆方向の、死の方向に向かって進んでいるような気がしてなりません。

今回の聖書は、パウロが書いた「ローマの信徒への手紙」の一部でした。「神の霊」や「罪深い肉」、「律法」など、難しい言葉がたくさん出てきますし、理屈っぽく書かれていますので、一読してもあまりよく分からない難しい文章になっています。今から約 2000 年前の時代です。手紙を書く際の紙もインク自体も大変高価なものでしたし、そもそも読み書きできる人自体が、全人口のうちの数パーセントしかいないような時代でした。その中で学者、専門家としての教育を受けてきたパウロが、同じように文字の読み書きが出来る、教育や訓練を受けてきている人たちを相手にして、手紙を書いているわけなので、誰でも読んですぐに分かるような易しい文章にはなっていません。

この箇所で、パウロは「肉」と「霊」という人間の二つの側面について述べています。「肉」とはそのまま私たちの「肉体」のことですが、五感で感じられる「感覚」のことでもあります。そしてもちろん私たちはそれによって食べたり飲んだり、寝たり、時には危険から逃げたりして、日々に生きているわけです。しかし、私たちの命というものは、決してそのような肉、感覚の側面だけが全てではありません。神様からの霊も与えられていて、私たちの中に、私たちの命と一体のものとして聖霊が私たちの中に息づいています。

6 節には「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和です」とあります。私たちは肉の身体をもって、日々に命を維持して生活していますが、その先にある肉体の終わりである「死」を避けることは誰にも出来ません。「モノ」や「カネ」が増えること、満たされることをひたすら求め続けるような世界経済の行く先もまた、このままでは地球の環境や資源を食い尽くす「死」に至ってしまいます。しかし、私たちにはそのような「肉」だけではなく、神様からの「霊」も与えられています。その「霊」は、イエス・キリストを十字架での死から引き起こされた神の霊であり（11）、私たちをキリストと共に苦しみながらも、共に栄光を受けさせ（17）、生きさせてくれる（13）ものです。だからこそ、私たちは自分自身の中に与えられている「神の霊」、いや私たち一人一人が「神の子」（14）、「相続人」（17）として、その中に生かされている所の「神の霊」、「キリストの心」に自分自身を合わせて、死へと向かう方向から、命と平和に向かう方向へと舵を切っていくことが出来ます。

以前に沖縄で「平和は、いつでも、放っておいても、その辺にあるものではなく、常に求め続け、創り出し続けていかなくてはならないものだ」という言葉を聞いたことがあります。沖縄では今でも戦争状態が続いていますから、平和を求め続ける運動が、草の根で続けられています。同様に私たち皆が、日々の暮らしの中で霊の思いに従って「命と平和」を求めていくことなしに、命と平和の神の国（ローマ 14：17）がやって来ることもないのではないでしょうか。

神の霊、神の力はどこに働くのか……。それは誰の目から見ても明らかなような大きい所、人とお金と物がたくさん集まる明るい所にではなく、むしろ人々から見向きもされない、埋もれた宝、取るに足らない小さな土の器、暗がりの中なのではないでしょうか。聖霊は、暗闇を照らし出す炎であり、奥深くに閉ざされた命に吹き込む風であり、人々を赦しと信頼で結びつける絆です（こどもさんびか改訂版 96 番「せいれいよ、きてください」）。

私たちの目の前にある壁は高く、困難は大きく、とても向こう側へは行けそうにない、もう諦めてしまおうかと思うような時でも、私たちは一人ではありません。命と平和を求めてやまない神の霊が、聖霊が私たちと共にいて、私たちを命と平和へと導かれます。暗闇の中にいる弱く小さくされている者たちの中にこそ、神の力は豊かに働くという聖書の言葉に信頼して、私たちは今日もここから神様と共に歩み出していきます。